



福井城下絵図

柴田勝家公の遺業

舟橋の鎖

舟橋とは、川に舟を幾艘も並べて、その上に板を渡すことで架けられる橋のことを言います。古くから舟橋は造られており、全国的にも地名などにその痕跡を読み取ることができます。

展示されている鎖は、北陸道が九頭竜川と交わるところに、柴田勝家公が天正6年(1578年)に渡したと伝えられる舟橋で用いられていたものです。この時の舟橋の大きさは不明ですが、江戸時代後期の『越前国名蹟考』では、舟橋にかかわる多くの記事が記載されています。その中では、川幅105間(約190m)、橋長120間(約216m)とも記されています。

また、勝家公の舟橋にまつわる話として、舟橋に用いる舟を越前海岸の各浦から集め、鎖は「刀さらえ」で集められた武器を利用して作ったと伝えられています。

九十九橋の橋脚

九十九橋は、北陸道と足羽川が交わる地に架けられた橋ですが、江戸時代には半石半木の珍しい橋として全国的にも有名でした。半石半木とは、橋の南半分が石で、北半分が木で造られるという構造のことを意味しています。

この橋が架けられていたという記録は朝倉時代にもありますが、半木半石の橋として架けたのは、文献、絵図等の研究から勝家公だと考えられています。

江戸時代前期(貞享2年:1685)の『越前国地理指南』では「大橋 長八拾八間 幅三間 板橋 四拾七間 石橋 四拾一間」とその大きさが記載されています。

石橋の部分は全て笏谷石で作られ、橋脚の長さは立っている場所によって異なりますが、2.5m~2.8mと推定されています。

江戸時代の二百数十年の間に九十九橋の架け替え工事は、記録としては十回以上あり、最後の工事は安政元年(1854)でした。また、明治7年(1874)に半石半木の橋として最後の架け替え工事が行われたと記録に残されています。



北の庄城址・柴田公園

福井県福井市中央1丁目地係
休憩棟 開館時間◆午前9時~午後5時

福井市役所 建設部 公園課
福井県福井市大手3丁目10-1
TEL(0776)20-5460・FAX(0776)20-5769

アクセス

- JR福井駅—(徒歩5分)—北の庄城址・柴田公園
- JR福井駅—(徒歩15分)—西光寺
- 京福バス(運動公園ヘル先回り)毛矢下車(徒歩3分)—西光寺
- 福井鉄道公園口下車—(徒歩2分)—西光寺



遺跡から分かる歴史の謎

北の庄城址公園

柴田公園のご案内



戦国武将 勝家と北ノ庄・福井の歴史にタイムスリップ

北の庄城址・柴田公園は、柴田勝家(1523?~1583)が築造した北ノ庄城の一部が考古学的発掘により初めて検出された遺構の上にあります。徳川期に結城秀康(1574~1607)がその遺構を大胆に改変し福井城を造営していった様子も地層の切り合いの中で確認することができます。

その後、藩政時代はもとより、明治維新後から戦後・現代に至るまで、この場所は福井の都市の中心部として発達してきました。

その意味で北の庄城址・柴田公園は、県都福井市の発生期を偲び、その後の発展の歴史的な形成過程を物語るかけがえのない史跡であるといえます。さらに、幾度か被災しながらもその度に甦り、近年公園と隣接する地に、あたかもこれを護持するかのようには柴田神社が再建整備され、勝家公およびお市の方が合祀されています。このことによって柴田神社は氏子のみならず、全国の勝家・お市の方ファンがお詣りに訪れる神社となっているのです。

北の庄城址・柴田公園、柴田神社における発掘調査の成果

現在の福井市街地は、福井城と城下町をうけつぎ発展してきました。福井城内にあたる部分は、官庁施設・繁華街が広がり、今も昔も政治・経済の中心であります。

この地にはじめて都市を整備したのは、柴田勝家が「北庄城」を築城したのが始まりです。

北庄城は、天正3年(1575)に築きはじめ、完成をみないまま、天正11年(1583)に落城したことが記されています。北庄城の範囲は不明ですが、足羽川と吉野川(のちの百間堀)の合流点を背にした築城をおこなっていることが考えられています。江戸時代の文献資料には、福井城の鳩之御門の南、百間堀につぎでた枡形に天守閣があったと伝えられています。これらの資料に合致する地が、現在の柴田神社にあたります。

北庄城が落城したあと、結城秀康が新たな城「北庄城」(のちの福井城)を築きます。この城郭については、現存する福井城の絵図で様子がうかがえます。本丸(現在の県庁)を中心に堀が幾重にも巡らされ、堀に囲まれた区画(曲輪)に家臣団の武家屋敷などが建ち並んでいました。しかしながら、明治時代の廃城、戦災と福井震災によって福井城の姿は失われてしまいました。

福井市教育委員会では、柴田神社の建設工事、北の庄城址・柴田公園の整備工事を契機に、「福井城」、そして、伝承されてきた「北庄城」を確認することを目的として平成5年度から6回にわたり発掘調査を実施しました。ここでは発掘調査の成果を紹介していきます。

時代	おもな出来事	
安土・桃山時代	1570年 元亀元年	朝倉・浅井連合軍と織田・徳川連合軍が姉川にて合戦。
	1573年 元正元年	越前国大名 朝倉氏滅亡。 織田信長、柴田勝家に越前八郡を与える(48万石)。勝家、越前に入国し、北庄に城を築きはじめ。
	1581年 元正9年	ルイス・フロイス、北庄城は築城中で、城などの屋根が石葺きであったことを伝える。
	1582年 元正10年	本能寺の変。
	1583年 元正11年	賤ヶ岳の戦い。勝家、羽柴秀吉に敗れる。秀吉、北庄城を陥落する。9層の天守閣であったことを伝える。
江戸時代	1600年 慶長5年	関ヶ原の戦い。徳川家康、結城秀康を越前68万石の城主とする。
	1601年 慶長6年	秀康、越前に入国し、新たな北庄城(福井城)を築き始める。
	1606年 慶長11年	北庄城(福井城)完成。
	1624年 寛永元年	3代藩主、松平忠昌、「北庄城」を「福原のち福井」と改名。
	1659年 万治2年	大火。
	1669年 寛文9年	寛文の大火。城内、ほとんど焼失。以後、天守閣は再建されない。
明治時代	1696年 貞享3年	福井藩、石高半減(25万石)。城地・家臣団の整理が行われる。
	1708年 宝永5年	御泉水邸の建設(養浩館)。
	1867年 元治元年	大政奉還。
	1871年 明治4年	廃藩置県。城内の建物や施設は取り壊され、堀も埋められる。

北庄城・福井城の城郭史



調査成果の説明会



福井城位置比定図

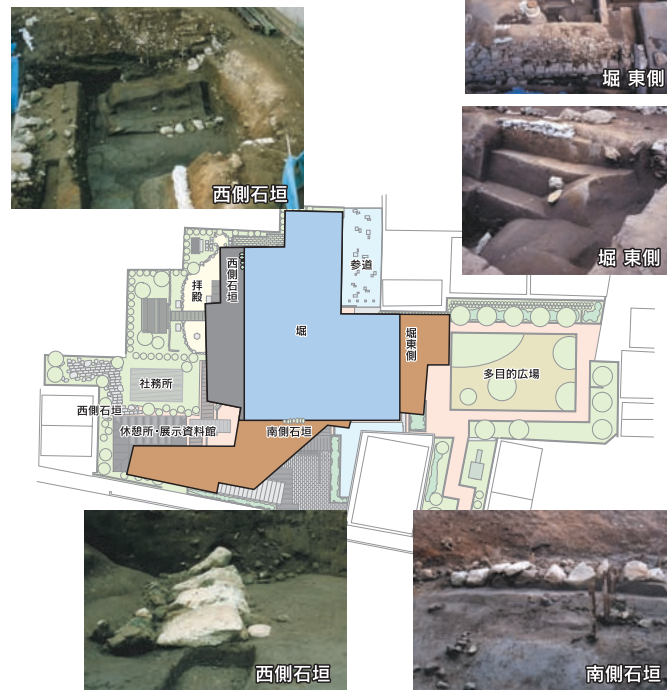


柴田神社周辺比定図



御城下之図(写し) 維新当時

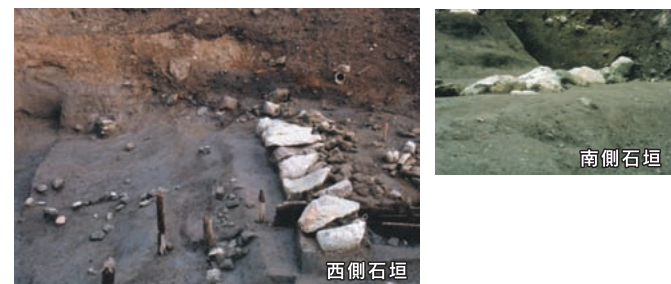
北庄城跡



北庄城は、これまで文献資料や伝承でのみ語られてきた城郭でありましたが、発掘調査によってはじめてその存在を確認しました。確認した堀は、大規模な城郭の一部ですが、吉野川(のちの百間堀)と堀を東からの防御としていた城郭の構造であったとうかがえます。また、福井城の築城によって、破壊を受けてその全貌が失われてしまっていることがわかりました。

北庄城の築城は、この地にはじめて都市を建設した事業であります。現在の福井市は北庄城を基礎とし、福井城にうけつがれて発展してきました。そのため、福井市を語る上で、その歴史的価値はたいへん大きいものであります。

堀と石垣



確認している堀は幅約25mで、北に向って延びています。堀を護岸していた石垣は、本来は、何段も積まれていたことがうかがえますが、福井城を築城する際に破壊され、堀の南と西側で1番下の根石のみ残っているにすぎませんでした。堀から16世紀後半の越前焼の挿鉢・甕、陶磁器、古銭や焼けた土壁が見つかっています。

福井城跡



堀によってさえぎられる北と南の区画(曲輪)、そしてその曲輪間をつなぐ道(土橋)を確認しました。曲輪には城内に向かう道に面して家臣団の武家屋敷が建ち並びます。

調査で確認した道は、南の曲輪から堀を渡り、互い違いの高石垣をぬけるかね折れで城内に通じています。このような構造は、南からの敵を防ぐことを目的としていることがうかがえます。南から眺めると、手前の高石垣に視界を遮られ、門は見えません。奥の高石垣の裏には階段が設けられていて、迎え撃つようになっています。

門について



門の両脇は高石垣で堅固に守られています。門は、西向きで前列に4本の柱、後列に2本以上の柱が考えられます。前列の柱のうち、2本は柱を据えるための穴を掘って柱を建てました。もう2本は高石垣に柱を据えたと考えられます。福井城絵図を参照すると、確認した門の位置に、舟蔵門・日向門・埋門等の名称が認められます。